

釋提桓因の來會(第十七圖)、之と同様に名高い長者給孤獨 Anāthapiṇḍika の祇陀林 Jetavana 買得(第十六圖)、世尊最初の歸郷と衆人の敬禮(第二十八圖)、父王が自ら之を迎へたのは此の時である。又林中に於ける野象の供養(第七圖)、何れも此等の圖は、バルハットやサーンチーに於けるよりも進んでゐる。然るに、佛陀伽耶でも、圓形彫刻を皆飾る爲には、本生譚をとる必要が出来たので、例へば第二十五圖を見れば、佛陀の菩薩であつた間に夜叉女子として生れた事を示したものであるが、之は巴利語原典中にある物語である。

之で、バルハットの玉垣を仲介として、中印度古代派發達の終りをなすサーンチー諸門の浮彫に進む事となる。サーンチーの東門を取つて見れば、その題材は悉くか、さもなくても殆んど全部が佛敎的になつてゐる。少くともその傾向を示してゐる。實際この中、或題材は之を對にして繰返してゐるが、之は純裝飾的な役目のものとして別にしようと思ふのである。然し、他日、更に巧みに、其の象徴的な意味を見出す様な事がないとは限らない。此の頂上にあるナンディパダは單に裝飾的のものに過ぎないであらうか。然し之は寶座